

統合産婦人科学研究コアセンター

融合、拡大による柔軟な体制



あるが、「妊娠の高齢化により流産数が増加していることは事実であり、これをくい止める手段として受精前診断の臨床研究を行う価値は充分にある」と日本産婦人科学会では見解を述べている。

ART 東北大学大学院医学系研究科附属 創生応用医学研究センター

産婦人科医療に関するテーマは、専門家・一般人を問わず、社会全体の関心事である。例えば、最近では、新型受精前診断承認の話題が多くなるとの耳目を集めた。受精前診断は体外受精によって得られた受精卵の一部を採取し、染色体異常の有無を調べることによって行われる。これまでも筋ジストロフィーや習慣流産につながる特定の遺伝子や染色体の異常に限って検査されてはいたが、このたび日本産科婦人科学会は全ての染色体を対象にした新しい受精前診断の臨床研究を承認した。

この臨床研究では、受精前診断によって異常がないことが確認された受精卵のみを子宮に戻すことにより、受精前診断が流産回避に有効かどうかを検証する。受精卵を着床前にスクリーニングするというこの検査は、「命の選別」であるとの批判も

▼コアセンター長 八重樫伸生

受精前診断の他にも、子宮頸がん予防HPVワクチンの副作用、卵子提供や近親者の精子を用いた体外受精と出自を知る権利、代理懐胎など、社会的・倫理的観点から産婦人科医療が抱える問題は枚挙にいとまがない。少子化・晩婚化の社会情勢に対応し、変わりに対し、変わりにゆく環境・社会・時代に適応しながら、これら諸問題を論理的に解決することが、常に産婦人科研究には求められている。

分子生物学、細胞生物学の急激な進歩により、産婦人科研究を取り巻く環境もまた大きく変遷してきた。例えば、様々な臓器や組織の細胞に分化可能な万能細胞や、受精卵から作製された胚体細胞などの基礎研究は今までに最盛期を迎えており、これらの細胞の実用化、臨床応用も始まりつつある。また次世代シーケンサーを代表とする解析

変わりゆく社会に適応 成果直結型の人材交流めざす

技術の進歩には目覚ましいものがあり、10年前には考えられな

降、産婦人科学は複数の専門分野に分かれ、各分野内でもさらに研究内容が細分化されるようになった。このため各分野間・研究者間での情報交換に努めて

ける柔軟な体制を構築するために創設されたのが、統合産婦人科学研究コアセンターである。センターでは、深い専門領域をもつ各研究チームをゆるやかに融合し、大きく広がった裾野を俯瞰しながら、全体で産婦人科学研究を行う体制を確立する

とここで、従来の産婦人科学は「女性の生涯と次世代」という幅広い研究分野を扱っていたが、各教室がそれぞれ個別のテーマについて研究を行ってきた。また、国立大学法人化以降、経済的な困難に陥り、

このうち最も留意している点は、形式ではなく結果(成果)に連結させることである。真に実りある研究へと発展させるため、全ての会合は自主参加で、強制するものではない。各々の自主的な向上心を尊重することで、研究者全体のスキルアップに努めている。お互いが背景や立場を気にすることなく、自由に議論できる環境を作り、積極的に交流が行えるよう注力している。この取り組みによる成果は、最近着実に創出されている。こういった取り組みが有望な若手研究者を将来の指導的研究者に育て、また新たな連携研究・横断研究の発掘および発展に

Infographic showing research areas: 更年期・性差医学の研究, 胎児心電図開発, 母性看護学, がん転移機構, 胎盤の病理学解析, 胎盤形成とエピジェネティクス, 早産児発達障害の生理学的解析, 婦人科がん発生と環境因子, 血管新生とがんの進展, 婦人科領域の代替医療, 受精のメカニズム, 胚発生とエピジェネティクス, 婦人科内分泌治療の開発

卵・精子細胞から、個体発生、分化、そして女性の成長、老化、癌化に至る包括的研究基盤を構築し発展させる。

統合産婦人科学研究 コアセンターのホームページ http://www.art-med.hokudai.ac.jp/introduction/women/index.html